The Pragmatics Society of Japan
日本語用論学会
NEWSLETTER
http://www.pragmatics.gr.jp

No.53 / Spring 2025

会　長　秦　かおり
事務局　〒181-8612 東京都三鷹市下連雀 5-4-1　　杏林大学外国語学部　八木橋宏勇研究室内
事務局連絡先 secretary-at-pragmatics.gr.jp
郵便振替口座　00900-3-130378　口座名：日本語用論学会
ゆうちょ銀行口座　記号・番号：00900 - 130378　日本語用論学会
支店番号：099（店名：〇九九）　当座預金　口座番号：0130378　日本語用論学会

語用論研究の新潮流 (12)

生成 AI と語用論

金丸敏幸（京都大学）

2022 年末に登場した ChatGPT は、その高度な言語能力で社会に様々なインパクトを与えた一方、言語とコミュニケーションに関する私たちの理解に対して根本的な問いを投げかけた。ChatGPT などの言語生成 AI（以下、生成 AI と表記する）に利用されている Transformer と呼ばれるメカニズムは、入力系列全体を同時並列的に参照することで、文脈情報を効果的に捉えることができる (Vaswani et al., 2017)。その Transformer による大規模言語モデル（Large Language Mode: LLM）は、従来の記号処理とは異なり、膨大なデータから統計的パターンを学習し、言語構造を習得する。LLM が明示的な文法規則なしに複雑な構造を内在化する点は、統計学習の重要性を示すとともに、言語生成や言語理解が必ずしも高次の記号操作を必要としない可能性を示唆している。LLM の解釈可能性に関する研究は、モデルの多層構造が単語や文法といった低次の具体的な統計的パターンから高次の意味・語用論的関係を処理するものへと段階的に抽象化していることを解明しつつある (López-Otal et al., 2025)。

生成 AI の言語能力は LLM の高い文脈理解能力に支えられている。生成 AI は文法的に適切な文章を生成したり、複雑な構文の文章の意味を理解したりするだけでなく、これまでの自然言語処理では難しかった比喩などの解釈も処理することが可能となっている。話者の意図や含意といった語用論的推論や皮肉などの解釈については、現段階で人間と同程度の能力を示すこともある (Min et al., 2023)。出力についても文脈に応じて語調やスタイルを使い分ける能力を持つ。LLM は大量のテキストデータから社会的文脈を学習し、出力の調整時に言語使用について学習を行っている。生成 AI の文脈理解では、直前の対話だけでなく、参照している文書全体のテーマや、場合によっては他の対話で用いられた情報などのような、より長期的な関係といった広範な文脈情報を統合し、入力の解釈や出力の生成に反映している。こういった文脈処理能力は、文章の意図の理解や、より複雑な推論の基盤となっている。

生成 AI の基盤となる LLM は、次に出現する単語（厳密には単語ではなく、サブワードと呼ばれる単位 (cf. Kudo & Richardson, 2018)）を予測する学習が基本となっているが、これは単純に見えて、じつは言語の本質に関わる問題を含んでいる。次に出現する単語の予測が成功することは、言語そのものの予測可能性を示している。それは単なる単語の統計的な規則性を超え、何をどのように言うべきかという語用論的な適切性の学習にまで及んでいる。これによって、LLM による言語の生成は受け手の期待を考慮した協調的行為となり、言語モデルは人間のコミュニケーション方略に関しても内在化していることになる。

別の面に目を向けると、生成AIがAPIのようなプログラムのサービスとしてだけ提供されるのではなく、対話形式という形で登場した背景には、技術的な要請だけではなく、語用論的な要因もあると指摘しておく。技術的な要請としては、対話形式が段階的な文脈の構築と出力の制御の両面において容易であることが挙げられる。一方、語用論的な要因としては対話の持つ特性が挙げられる。対話という形式は、人間同士のコミュニケーションにおいて共通基盤 (Clark, 2000) を段階的に構築する過程であり、生成AIとユーザーとが対話形式を取っているのは、これを模倣するものであると言える。また、対話形式であれば、生成AIの応答に誤りがあった際、追加の指示や訂正によって出力を調整できる。これは人間同士の対話における修復過程と同様であり、コミュニケーションの観点から見て理にかなった設計となっている。

このような生成AIとの対話は、従来の語用論に新たな視点をもたらす。ユーザーは生成AIに対して丁寧語で呼びかけるといったように、人間同士のやり取りのような語用論的アプローチを用いる。これはポライトネス (Brown & Levinson, 1987) が相手の内的状態とは無関係に作動し、社会的相互行為の形式的な要求として機能している可能性を示唆している。また、生成AIから望ましい応答を得る「プロンプトエンジニアリング」という手法 (OpenAI, 2023) が提唱されているが、これは見方を変えると、生成AI に適切な依頼をするための新しい語用論的技法であると見ることができる。

生成AIの登場によって、語用論に新たな研究対象が生まれる面もある。従来の語用論では話し手の意図の推論が重視されたが、生成AIは明示的な意図モデルなしに適切な語用論的推論を行うことができる。このことは、意図が心的状態である必要はなく、文脈パターンと言語表現の統計的関係からの推論で実用的な処理が可能であることを示唆する。生成AIが文脈を理解するという事実は、文脈が単なる背景情報でなく、言語理解の重要な構成要素であることを示している。含意の理解も、論理的な推論ではなく、統計的な関連性の認識で実現しうる可能性がある。一方で、含意の理解には、論理的な推論能力、生成 AI における「思考の連鎖」（Chain of Thought: CoT）が不可欠であるとする結果もある (Ruis et al., 2022)。含意に関す研究は、生成AIの出力を分析することで、さらに深化させることができるであろう。

ただし、生成AIが示すこの「意図らしきもの」は、人間が持つ内発的な欲求や信念に基づく「意図」とは本質的に異なる点に留意が必要である。生成AIの推論は、あくまで学習データ内の膨大な言語情報から導き出されるものであり、共感や倫理的配慮、あるいは個人的な目標や価値観に基づいた意図を持つわけではない。生成AI は目的関数に従って最適な出力を生成するが、そこに人間のような主観的な意図は存在しない。それゆえ、複雑な社会的状況や予期せぬ出来事に対する人間的な判断や、倫理的ジレンマの解決、あるいは真に創造的で自律的な目標設定は生成AIには期待できない。このような「意図なき知性」とのコミュニケーションは、私たちが他者の意図をどのように認識し、対処しているのか、そして、コミュニケーションの本質そのものについて、さらなる問いを投げかけている。

生成AIの存在は、語用論を広い意味における人間の認知能力の説明から、より広範なコミュニケーション原理の探求へと拡張する契機となる。一方で、現在の生成AIの語用論的能力には限界もあり、真の言語理解とは隔たりのあることも確かである。語用論には、その限界の克服と、より洗練された人間と生成AIの相互コミュニケーションのための理論的貢献が期待される。これからの生成AI時代において、語用論はより一層重要な研究領域となるであろう。

参考文献

Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage.* Cambridge University Press.

Clark, H.H. (2000). Common Ground. In *The International Encyclopedia of Linguistic Anthropology*, J. Stanlaw (Ed.). https://doi.org/10.1002/9781118786093.iela0064

Kudo, T., & Richardson, J. (2018). SentencePiece: A simple and language independent subword tokenizer and detokenizer for Neural Text Processing. *arXiv preprint arXiv:1808.06226*. https://arxiv.org/abs/1808.06226

López-Otal, M., Gracia, J., Bernad, J., Bobed, C., Pitarch-Ballesteros, L., & Anglés-Herrero, E. (2025). Linguistic interpretability of transformer-based language models: A systematic review. *arXiv preprint arXiv:2504.08001*. https://arxiv.org/abs/2504.08001

Min, C., Li, X., Yang, L., Wang, Z., Xu, B., & Lin, H. (2023). Just like a human would, direct access to sarcasm augmented with potential result and reaction. In A. Rogers, J. Boyd-Graber, & N. Okazaki (Eds.), *Proceedings of the 61st Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics (Volume 1: Long Papers)* (pp. 10172-10183). Association for Computational

Linguistics. https://doi.org/10.18653/v1/2023.acl-long.566
OpenAI. (2023). *OpenAI platform documentation*. https://platform.openai.com/docs/guides/
Ruis, L., Khan, A., Biderman, S., Hooker, S., Rocktäschel, T., & Grefenstette, E. (2022). The Goldilocks of pragmatic understanding: Fine-tuning strategy matters for implicature resolution by LLMs. *arXiv preprint arXiv:2210.14986*. https://arxiv.org/abs/2210.14986
Vaswani, A., Shazeer, N., Parmar, N., Uszkoreit, J., Jones, L., Gomez, A. N., Kaiser, L., & Polosukhin, I. (2017). Attention is all you need. *arXiv preprint arXiv:1706.03762*. https://arxiv.org/abs/1706.03762

＊＊PSJ28（第 28 回大会）ご案内＊＊

日本語用論学会第 28 回大会は、以下のとおり、慶應義塾大学三田キャンパス（東京都港区）で開催いたします。

◆日時：11 月 29 日（土）、11 月 30 日（日）
◆場所：慶應義塾大学（三田キャンパス）
〒108-8345　東京都港区三田 2-15-45
（アクセスについては P.5 をご参照ください。）

★ 開催方法変更時の案内について
社会情勢の影響によりオンライン開催へ変更する場合は、学会公式ウェブサイトと会員メーリングリストで告知します。

◆ 主なプログラム
大まかなプログラムは以下を予定しております。タイムスケジュールや変更点など、詳細は、追って学会公式ウェブサイトと会員メーリングリストでお知らせいたします。

【大会テーマ】
「カオスと秩序」

≪11 月 29 日（土）≫ ≪11 月 30 日（日）≫

☆特別講義
☆ワークショップ
☆研究発表
☆ポスター発表
☆会員総会
☆基調講演
☆懇親会
☆研究発表
☆語用論茶寮（昼休み）
☆シンポジウム

＊今大会より、ワークショップの発表時間と大会発表賞の応募条件が変更されています。

【基調講演】
片岡邦好先生（愛知大学）
＊タイトルは、決定次第お知らせいたします。

【特別講義】
詳細は、決定次第お知らせいたします。

【シンポジウム】
細馬宏通先生（早稲田大学）
﨑田智子先生（同志社大学）
高木智世先生（筑波大学）
＊タイトルは、決定次第お知らせいたします。

◆ 発表募集
発表形態は、口頭発表、ポスター発表、ワークショップの 3 種類です（発表言語は、日本語もしくは英語）。各スケジュールと応募要項は以下をご覧ください。皆様のご応募をお待ちしております。

・投稿締め切り：
2025 年 8 月 3 日（日）23:59 JST
・採否通知：
2025 年 9 月下旬頃
・大会発表要旨（Abstract）原稿締切：
2025 年 10 月中旬頃
・大会発表論文集（Proceedings）原稿締切：
2025 年 3 月 18 日（水）23:59 JST

◆ 応募要項
①申し込み資格
口頭発表・ポスター発表の第一発表者、ワークショップの代表者として発表を申し込むには会員である必要があります。

②発表テーマ
語用論研究と関連するテーマであれば自由。

③発表形態と発表時間
1) 口頭発表：発表 25 分＋質疑応答 10 分
2) ポスター発表：1 時間（掲示時間）
3) ワークショップ：2 時間（司会者を含めて 3 名以上の団体であること）

④発表言語：日本語もしくは英語

⑤申し込み先
研究発表の応募は、「マイページ」（学会公式ウェブサイトの会員専用ページ）から行って

ください（応募するには、今年度の年会費が「支払い済み」である必要があります）。この「大会発表応募ページ」は、6 月上旬頃にオープンする予定です。投稿方法の詳細は後日学会ウェブサイトでお知らせいたします。

⑥申し込み原稿

発表内容の要旨をファイルにまとめて申し込んでください。発表の種類にかかわらず、申し込み原稿は全て同じ形式です。以下、「申し込み原稿の形式」で指示された形式やファイルフォーマットに従わずに申し込んだ場合、その内容にかかわらず不採用となることがあります。

<申し込み原稿の形式>
用紙サイズ：A4 縦
規定文字数：日本語 2,500 字以内、英語 500 words 以内。日本語の場合は文字数を、英語の場合は word 数を、原稿の末尾に記入してください。
ファイル形式：Microsoft Word 形式(doc, docx), PDF 形式 (pdf)

・氏名と所属は記入しないでください。
・発表タイトルを 1 行目に、タイトルの下に 1 行空け、次の行から本文を記入してください。
・ワークショップの場合は、発表者全員分の要旨が規定文字数や word 数に収まるようにまとめてください。
・文字数と word 数には、例文・表・キャプション・注釈を全て含みます。ただし、図形内のオブジェクトに添えられた文字や参照文献は含みません。日本語原稿の中にアルファベット等の半角文字を含む場合、半角文字 2 文字を 1 字と数えます。
・ 参考文献の書式は『語用論研究』に準じます。
・タイトル、ならびに、サブタイトルは、（大会発表委員会、大会総務委員会から依頼する場合を除き）一切変更はできません。採択や発表後に公表される「プログラム」「要旨集」「大会発表論文集（Proceedings）」に掲載されるタイトルは、申し込み時のタイトルとなります。なお、発表応募時に（「マイページ」内の）「大会発表応募ページ」に記入するタイトルと、ファイルで提出される申し込み原稿内のタイトルが一貫しているか、入念にご確認をお願いいたします。

⑦申し込み原稿の留意事項

申し込み原稿には、表現や構成のわかりやすさと説明の一貫性が求められます。かつ、以下のような点について過不足なく論じる必要があります。

・問題となる現象
・その現象についての先行研究と問題点
・現象の分析に用いるデータ
・現象の分析方法
・現象の分析結果
・分析結果に基づく結論と理論的含意

⑧申し込み制限

一人の会員が発表者として申し込みできるのは、一大会につき 2 件までです（ワークショップ含む）。かつ、第一発表者、または、ワークショップの代表者として申し込みができるのは一大会につき 1 件のみです。

⑨二重投稿の禁止

口頭発表・ポスター発表・ワークショップへの発表申し込みにおいては、二重投稿を禁止します。大会委員会が二重投稿と認めた場合、その申し込みは受理されません。かつ、次年度の大会においても当該者を発表者に含む申し込みは受理しません。

・二重投稿とは、他の学会で既に発表した（もしくは、発表を申し込み中である）内容、または、既に学術的刊行物に掲載された（もしくは、投稿中である）論文と極めて類似する内容で申し込むことを指します。
・学士論文・修士論文・博士論文は、公表や出版がされていない場合、「学術的刊行物」には含めません。
・学会の発表や学術的刊行物の掲載へ応募したものであっても、既に不採択が決定している内容で申し込む場合は、二重投稿に含めません。

⑩選考結果の通知

選考結果は、9 月下旬に第一発表者宛、または、ワークショップの代表者宛に通知します。

⑪No Show に対する措置

発表が採択されたにもかかわらず、大会当日に大会発表委員会に無断で発表を行わない場合やポスターの掲示のみで説明を行わない場合は、これらを「No Show」とみなし、学会ウェブサイトにて公表します。ただし、事前、または、当日 に（やむをえない場合には事後に）、発表を行えない（行えなかった）合理的な事情の説明がある場合には、「キャンセルされた発表」とします。

⑫大会発表賞

大会発表賞への候補となる応募時の条件は、以下のとおりです。

＜応募条件＞

・発表者が現会員であり、かつ、大学院生か学部生、もしくは 2025 年 4 月 1 日時点で修士の学位取得後 10 年未満であること（修士の学位を取得後に産前産後の休暇を取得、または、未就学児を養育していた場合は、当該期間を除くと修士の学位取得後 10 年未満となる者を含む）。

・共著発表の場合は、第一発表者がこの条件を満たし、かつ当日の発表と質疑応答も主としてその者が行うこと。

◆ 問い合わせ先

投稿に関するお問い合わせは、下記アドレス宛に 7 月 28 日（月）までにお願いいたします。

E-mail：presentation -at- pragmatics.gr.jp

（大会発表委員長・早野薫宛）

◆ 第 28 回大会会場・慶應義塾大学（三田キャンパス）への交通・宿泊について

〔大会会場について〕

会場：〒108-8345　東京都港区三田 2-15-45

慶應義塾大学（三田キャンパス）

最寄駅・所要時間：

・田町駅（JR 山手線／JR 京浜東北線）徒歩 8 分

・三田駅（都営地下鉄浅草線／都営地下鉄三田線）徒歩 7 分

・赤羽橋駅（都営地下鉄大江戸線）徒歩 8 分

アクセス情報：

https://www.keio.ac.jp/ja/maps/mita.html

［宿泊について］

・日本語用論学会は、宿泊施設の紹介・斡旋はしておりません。

・東京都内の宿泊施設は大変混雑している状況です。できるだけ早めの予約をおすすめいたします。

・会場まで徒歩圏内のホテルを検索する際には、「田町」「三田」がキーワードとなります。また、「浜松町」「品川」「高輪」「芝」も、電車で 1~2 駅の距離であり大変便利です。

＊＊研究会コーナー＊＊

◆中四国九州地区研究会

九州大学言語文化研究院主催

「認知語用論講演会・研究会」

令和 7 年 3 月 8 日（土）に九州大学伊都キャンパスにて、3 回目となる「認知語用論講演会・研究会」を開催しました。まず、吉村あき子先生（奈良女子大学）に「アイロニー発話のストラテジー分析 ― 試論 ―」という題目でご講演いただきました。アイロニー研究には多くの先行研究があり、さまざまな枠組みで分析が行われています。ご講演は試論という副題でしたが、ハリーポッターの小説に見られるアイロニーの例が先行研究の枠組みでどの程度説明ができるのか、丁寧な分析から始まりました。アイロニー発話とはアイロニー原型の認識構造との認識的類似性をストラテジーとした意図明示的刺激であるという視点は大変興味深いものでした。続いて 2 件の研究発表が行われました。まず、 蔦原亮先生（九州大学）による「se trata de ― 聞き手目当てのコピュラ動詞句 ―」は、元来「～ついて論じられる」という意味であるスペイン語の動詞句 se trata de が担うコピュラとしての用法や機能は文法化および間主観化の例であるとする論考でした。コピュラとして使用されることで主語にあたる対象への追加説明を行う語用論的特性は、聞き手の理解を考慮したものであると結論づけられました。続いて、山本尚子先生（大阪学院大学）による「関連性理論からみた構文が意味するもの ― トートロジーの用例を中心に―」は、関連性理論における手続きの観点からトートロジーという表現形式、構文を捉え直すという新たな研究でした。「A は A だ」や「A ことは A」「A ものは A」のような同語反復それぞれの形式が解釈のための独自の手続きをコード化していると結論づけられました。今回も対面とオンラインで開催しました。終了後もアイロニーの捉え方の枠組みや構文にコード化された手続きについての活発なやりとりで、会場はしばらく盛り上がりました。

（九州大学　大津隆広）

◆メタファー研究会

2025 年 3 月 19 日（水）、「メトニミー／シネクドキーフェスティバル」と題して、京都大学吉田南キャンパス（Zoom 併用）にて研究会を開催しました（京都言語学コロキアム（KLC）との共催）。当日、会場では約 50 名、Zoom でも常時 50 名以上のみなさまにご参加いただき、活発な議論が行われ、盛況のうちに閉会となりました。プログラムの一部を下記に掲載します。発表要旨は、研究会 Web サイト（https://sites.google.com/site/metaphorstudy/）で公開中です。

午前：10:00～12:15
司会：角出 凱紀（京都大学［院］）／石井康毅（成城大学）

・「小説の中のメトニミー　―川上未映子の『ヘヴン』の事例―」（Zoom）
　伊計拓郎（帝塚山学院大学）
・「時間と出来事のメトニミーに関する日英語対照研究―情報構造の観点から―」
　椹木幹人（東北大学［院］）、スワスティカ・ハルシュ・ジャジュ（東北大学［院］）
・「日本語における換喩および提喩の用例と分布」
　加藤祥（目白大学）・菊地礼（長野工業高等専門学校）・浅原正幸（国立国語研究所）
・「「寒い立話」の中核をめぐって―「状況」内での選択と「ことがら」の分節―」
　佐藤らな（東京大学［院］）

午後：13:30-17:30
司会・ファシリテーター：大田垣 仁（近畿大学）

パネル・セッション
「いいウナギのつかみ方：持続可能なメトニミー／シネクドキー研究のアプローチ」

発表題目とパネリスト（パネリストの五十音順）
・「カテゴリーの提喩的弾性を考える：狭い意味での動物、広い意味での動物、単なる動物」
　氏家 啓吾（国立国語研究所）
・「文化を映し出す提喩：比喩表現を用いた文化の言語分析のアプローチ」
　小松原 哲太（神戸大学）
・「換喩と提喩をときほぐす」
　田中 太一（東京農工大学）
・「メトニミーを媒介するフレーム　―述語と項の意味構造に着目して―」
　冨岡 侑央（京都大学［院］）
特別討論者：谷口一美（京都大学）

これまでの研究会での発表にもとづく論文を収録した『メタファー研究』第 3 号（ひつじ書房）は、2025 年度中の発行を目指して編集が大詰めを迎えています。ご期待ください。

（杉本 巧）

＊＊委員会・事務局より＊＊

★『語用論研究』編集委員会より

4 月初旬に『語用論研究』第 26 号が J-stage にて公開されました(https://www.jstage.jst.go.jp/browse/pragmatics/list/-char/ja)。同号には 2 本の招待論文、4 本の一般投稿論文、4 本の書評が掲載されております。改めて投稿者各位、査読にあたってくださった外部査読者各位、そして様々な形でご協力いただきました編集委員会のみなさまに感謝申し上げます。お蔭様で『語用論研究』のオンライン化、即時公開は軌道に乗りましたが、以前の号でも申しましたように論文の投稿数の増加、扱われる語用論分野のテーマの多角化が次の課題です。

さて、今回は『語用論研究』への投稿を考えておられる方を含め、会員のみなさまに巷で話題になっている以下の本をご紹介したいと思います。『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』（阿部幸大著, 光文社, 2024 年, ISBN978-4-334-10380-4）です。この本は様々な書評等で取り上げられ、すでにご存じの方も多いかと思います。人文学分野の論文のアカデミック・ライティングの教科書、手引書は枚挙にいとまがないのですが、この本は「人文系の論文のおおきな困難のひとつは、**きまったフォーマットがないということである**」(p.8, 強調は原著者, 以下同様)という問題意識から出発しています。その上で、「「アカデミック・ライティング」の範囲を、学部生の期末レポートから「査読」と呼ばれる審査をクリアして学会誌に掲載される本格的な学術論文まで、およそ**学問にかかわるすべての文章を含む**ものとして想定して」(p.7)います。そしてその達成目標を「**初学者が独力で論文を書けるようになること**」(p.7)と「**中級から上級までの院生や研究者が、より優れた論文を、よりスピーディかつシステ**

マティックに書けるようになること」(p.7)としています。類書と一線を画す筆者の気迫のようなものが感じられます。

本書の構成を少し長くなりますがご紹介します。

はじめに
原理編
第1章　アーギュメントをつくる
第2章　アカデミックな価値をつくる
第3章　パラグラフをつくる
コラム　査読について

実践編
第4章　パラグラフを解析する
第5章　長いパラグラフをつくる
第6章　先行研究を引用する
コラム　通読と書評について
第7章　イントロダクションにすべてを書く
第8章　結論する

発展編
第9章　研究と世界をつなぐ
第10章　研究と人生をつなぐ

演習編
0.　演習編について
1.　トピックからアーギュメントをつくる
2.　パラグラフを解析する
3.　アブストラクトを解析する
4.　イントロダクションを解析する

あとがき

いかがでしょうか？「トピック」「アーギュメント」「パラグラフ」という概念の理解を理論的・実践的に深め、ひいては研究者にとって「学術論文を書くこと（さらに読むこと）」はどのような知的営為であるかを考えさせる構成になっています。

著者の阿部氏は「まず日本でトラディショナルな文学研究を身につけ、のちにアメリカで学際的な文化研究に移行し、現在は日本語と英語の両方でいくつもの分野にまたがって研究している人文学研究者」(p.11)です。筆者（堀江）も、文学と言語学という違いはあるものの、阿部氏とこれまでの研究者としてのキャリア形成の過程に共通点があり、かつて英文アブストラクトの構造の解析およびアブストラクト執筆の効用について「英語での研究論文執筆－糸口としての英文アブストラクト作成－」（『日本語学』（明治書院）11 月臨時増刊号, 2013 年）という小論を書いたことがあります。

阿部氏の論じられていることに我が意を得たりという思いを抱くとともに、自らの論文執筆の仕方についても再点検の必要を感じているところです。『語用論研究』への投稿を考えておられる方を含め、語用論学会会員のみなさまにとって非常に有益な一冊としてご推薦いたします。

（編集委員長　堀江薫）

★大会総務委員会プロシーディングズ担当より

目下、大会総務委員会（プロシーディングズ担当）では、第27回年次大会（2024年度）で発表された論文をとりまとめ、『大会発表論文集』(Proceedings)（第 20 号）（電子媒体のみの発行）を作成いたしております。ご提出いただきました原稿は、7 月末を目途に当学会ホームページ上にて公開される予定です。原稿をご提出いただいた会員の方々には、ご協力いただき誠にありがとうございました。学会活動の記録、研究成果の波及のためにも、引き続き『大会発表論文集』へのご協力をよろしくお願い申し上げます。

（中馬隼人）

《事務局より》

★会費納入のお願い

年会費は、一般会員 6,000 円、学生会員 4,000 円、団体会員7,000円です。本学会は、会員の皆様に納入いただく年会費で運営されております。ご協力をお願い申し上げます。

【郵便振替】
口座番号：00900-3-130378
口座名：日本語用論学会

【ゆうちょ銀行】
支店名：099
口座種類：当座
口座番号：130378
口座名：日本語用論学会

学会ホームページの「会員専用ページ」にて、クレジットカード決済も可能です。

会員ステータス、会費納入、会員専用ページへのログイン等に関するお問い合わせは、下記までお願いいたします。
日本語用論学会 会員管理室
E-mail: psj-at-outreach.jp

★令和 3 年以降の激甚災害等による影響を受けられた皆様へ

日本語用論学会では、激甚災害に指定された豪雨等の被害に遭われた会員の皆様に対し、お申し出いただくことにより「2025 年度会費」ならびに「2025 年度年次大会」の参加費を免除いたします。被災された皆様方の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

日本語用論学会事務局
〒181-8612　東京都三鷹市下連雀 5-4-1
杏林大学外国語学部　八木橋宏勇研究室
E-mail: secretary-at-pragmatics.gr.jp
（事務局長　八木橋宏勇）

★《新刊・近刊案内》★

■『日本語会話における自慢・愚痴・自己卑下と共感についての研究：共感が対人関係構築に果たす役割』釜田友里江（著）くろしお出版（3,200 円＋税）

自慢、愚痴、自己卑下。いずれも人間らしい会話につきもののコミュニケーション行動である。こうした発話が産出されると、会話相手は何らかのやり方でそれを受け止める必要に迫られる。自慢・愚痴・自己卑下を受け止める一つのやり方、それが「共感」であり、私たちの対人関係構築の鍵となるものである。本書は、著者が 2017 年に名古屋大学に提出した博士論文に加筆修正を施したもので、会話における「共感」をキーワードとし、自慢・愚痴・自己卑下といった会話文脈における「共感」の記述を行っている。豊富な会話事例の丹念な分析は、自慢・愚痴・自己卑下といった、日常にありふれた言語行動が、きわめて精密な方法で産出され、処理されていることを示してくれている。本書は会話分析（CA）の枠組みで行われた研究をまとめたものである一方で、CA 以外の分野の専門家や言語教育の実践家など、きわめて幅広い読者にとって読みやすいよう配慮されている点も特長だ。随所に論点を視覚的に示す図が多用されており、読者の理解を深める一助となるだろう。また、近年よく聞かれるようになった反応表現「それな」をめぐる分析に一章割かれている点でも、記述的な価値が高い。多くの語用論研究者にとって、新しい分析的視座を与えてくれる一冊である。（2024.4.10 刊）

■『新しい言語心理学』茂呂雄二・伊藤崇・新原将義（編） ひつじ書房（定価 2,400 円+税）

本書は、「人々の生活」、「心の営み」、「ことば」といった三者の一体性に着目し、「ことばの実践」という考え方を中心にして書かれた言語心理学の教科書である。「ことばの実践」を、我々の生活と一体となって変化し続ける「意味づくりの活動」と捉え、その活動におけることばの「多様性」、社会文化的なコンテクストとの「一体性」、そうした実践を通して心の営みを作り直す「創造性」について、多くの研究事例をもとにわかりやすく記述している。社会言語学や認知言語学、記号論や語用論、言語習得や発達障害、会話分析やナラティブ分析など、様々な学問領域・観点・手法を通して「ことばの実践」を描き出しながら、ことばの本質を問い直す内容となっており、これから言語学を始める学生にはもちろん、「言語とは何か」について再確認し新たな研究の方向性を模索しようとする研究者にもお勧めの好著である。（2024.10.1 刊）

■『中国語の役割語研究』河崎みゆき（著） ひつじ書房（定価 4,600 円＋税）

本書は、中国語における「役割語」の存在とその特徴を多角的に探究した学術書である。豊富な事例とともに、「官腔（官僚ことば）」「娘娘腔（オネエことば）」「学生腔（学生ことば）」といった伝統的な中国語の役割語の存在や、方言と人物像の結びつき、ジェスチャーなど非言語的要素との関係が詳細に解説されている。日本語における「役割語」研究との比較を通して、中国語

の特性や社会的背景も明らかにされている。著者が述べているように、中国語の役割語研究は言語学への貢献にとどまらず、異文化理解や中国語教育、翻訳、商品命名、言語資源やステレオタイプに関する言語政策の検討など、多方面での応用が期待される。本書は、言語学・社会言語学・翻訳学・外国語教育などの分野に携わる研究者や学生にとって、有益な資料となるだろう。（2024.10.21 刊）

■『動的語用論の構築へ向けて　第 4 巻』田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝（編）開拓社（定価 4,000 円＋税）

本書は、『動的語用論の構築へ向けて』の第 4 巻として、語用論とその関連分野で活躍する研究者の論考をまとめた最新の論文集である。本巻は、チー＝ヘー・エルダー氏とカーシャ・ヤシュチョウト氏によるデフォルト意味論を援用した意味構築についての論考からはじまり、日本語とロシア語での話者交替のメカニズム、スポーツ実況中継における言語使用、応答詞「うん／はい」、1 人称代名詞の使用に関する会話分析的研究、取り立て詞の実験語用論的研究、ユーモア理解と神経科学、物語りに伴う感情表出や、掛け合い歌についての言語人類学的研究、ポライトネスとインポライトネス、異文化間の相互行為における共通基盤化、形式意味論の観点からみた慣習的含意などの論考を含む。個々の論文は簡潔にまとめられた論考が多いため、語用論とその関連分野のフロンティアを俯瞰的に理解するのに最適である。（2025.1.9 刊）

■『グライス語用論の展開：非自然的な意味の探求』平田一郎（著）ひつじ書房（定価: 4,900 円＋税）

本書は、Grice の「非自然的意味」という概念を整理・再評価し、喜ばせる、驚かせる、印象付ける、怒らせる、悲しませるといった話し手の聞き手に期待する心理的な反応を語用論的に説明する研究書である。本書は、Grice の意味論・語用論を整理・発展させ、これまであまり追及されることのなかった Grice の理論の潜在

的な可能性を探ることを目的としている。私たちのことばによるコミュニケーションは、主に命題的なやりとりであり、Grice を受け継いだこれまでの研究は、主に命題的なやり取りに焦点を当てるものであったが、本書では、他の理論が議論することの少ない非命題的な言語要素の機能と非命題的な効果が、Grice の非自然的な意味の説明から導き出せることを示すことを目的としている。第 1 部と第 2 部では、Grice の言語理論の仕組みの全体像を示したのちに、第 3 部において個別の言語現象の分析が展開されている。特に第 1 部では、Grice の言語理論の全体像が非常に丁寧に説明されており、具体例が豊富であることから、意味論・語用論に関心のある学部学生にも挑戦しやすい研究書となっている。（2025.2.20 刊）

■『ディスコース研究のはじめかた：問いの見つけ方から論文執筆まで』井出里咲子・青山俊之・井濃内歩・狩野裕子・儲叶明（著）ひつじ書房（定価 2,700 円＋税）

本書は、社会言語学・言語人類学・語用論・談話分析・会話分析など、「ディスコース研究」に関連する基本的な知識から実践的な手法までを解説している。はじめに、「ディスコース研究」が人文社会科学分野でどのように位置づけられるかを概観し、研究の問いの探し方・育て方、データの収集・分析方法、資料検索の技法、論文執筆のプロセスなどを詳細に紹介している。また、ゼミの活用法についても具体的に述べられている。日常会話の分析、インタビュー手法、メディアディスコースの研究方法についても丁寧に解説されており、研究の進め方やデータの整理について具体的な事例が紹介されている。特に、各章末に卒業論文執筆やフィールドワークの体験談を扱ったコラムが収録されており、研究初心者にとって実践的

なガイドとなっている。さらに、第 4 章には、ことばのやり取りを日中対照研究の観点から分析する研究事例が掲載されており、異文化コミュニケーションに関心のある初心者にとって非常に参考となる。大学教員にとっても、学生の卒業研究指導において有益な一冊である。（2025.2.20 刊）

■『境界と周縁：社会言語学の新しい地平』三宅和子・新井保裕（編）ひつじ書房（定価 3400 円＋税）

本書は、21 世紀の言語・コミュニケーションを取り巻く種々の課題に、さまざまな「境界」があり、そこには「周縁」に追いやられた人々の言語生活があることを明らかにする。編者らによって企画された「ひと・ことばフォーラム」での発表などをもとに、11 名の研究者が LGBT ブームとジェンダー、翻訳通訳、危機言語、移動する人々とアイデンティティの交渉、方言やマイノリティ言語、言語イデオロギー、言語実践のリアリティなどをテーマとしており、社会言語学、語用論、言語人類学、方言学の分野に新たな研究の地平を照らしだしている。

また本編の論文のみならず、「コラム　私の研究遍歴」では、それぞれの研究者がどのようにして当該研究をするに至ったのかについて語られており本書の構成としても興味深いものとなっている。（2025.2.28 刊）

■『人はどのようにことばを使用するのか：意味・語用論からその応用まで』須賀あゆみ・山本尚子・長辻幸・盛田有貴（編）ひつじ書房（定価: 8,000 円＋税）

本書は、ひつじ研究叢書＜言語編＞の第 210 巻で、人がことばを用いて行うコミュニケーションを研究対象とした論文集である。副題の「意味・語用論からその応用まで」が示すとおり、ことばの意味や文脈的要素を扱うものはもちろん、幅広い領域で、各論者が知的好奇心をひきつけられた研究テーマについて、その成果をまとめている。論文の主なテーマは、ことば

の用法、構文、発話の意味、レトリック、談話、言語教育、社会との関わりなど多岐にわたる。研究手法も、現象の実態を明らかにして記述するもの、現象の分析をもとに理論的説明を探究するもの、社会への応用を考察するもの等、さまざまなアプローチが採用されている。本書は、多様なアプローチから、私たちは、どのようにことばを使用し、コミュニケーションを行っているのか、ことばの使い方や発話・会話の理解の仕方には、一定の法則があるのか、コミュニケーションを円滑にするためには、どのような工夫をしているのか、といった問いに対して、その答えを探究するものである。（2025.3.21 刊）

★広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思いますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報があれば広報委員会宛にお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。なお、紹介文は出版社によるものを利用するほか、広報委員が執筆を担当しています。

PSJ members selected this section's recently-published and forthcoming books on pragmatics. We invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written in your native language are especially welcome.

～編集後記～

■ニューズレター第 53 号をお届けします。今号も、皆様のおかげで大変充実した内容となりました。記事をご執筆くださった皆様には心より感謝申し上げます。近年、教育研究の現場に大きな影響を与えている生成 AI。語用論に携わる私たちだからこそ、その利便性と魅力を冷静に分析し、教育にも研究にも有効活用していく視点が重要だと考えています。来たる研究大会の発表募集も始まりました。皆様の積極的なご応募をお待ちしております。（横森大輔）

■新入生のフレッシュな雰囲気もそろそろ落ち着き、学期も半分くらい過ぎた頃でしょうか。個人的にも折り返し地点として心機一転し、こ

れからの学期後半に向けて、教育・研究にエネルギーを注いでいきたいところです。また、これから様々な学会の大会も開催されます。学術交流し学問の発展を共有する機会を大切に過ごしていきたいです。（野村佑子）

■初夏の候……とご挨拶したいところですが、今年は 4 月の段階で夏日、さらには真夏日が観測されましたね。季節の進みの早さに、身体がなかなかついていけません。技術の進化が著しい現代にあっても、自然の大きな流れには抗えず、振り回されながら日々を調整しているのだと改めて実感します。雨の日の 1 限など、特に。そんな季節の揺れの中、多くの方々のご尽力により無事 NL を発刊できましたことを、心より感謝申し上げます。寒暖差のある日々ですが、夏休みまでどうか穏やかにお過ごしください。（工藤貴恵）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～

日本語用論学会 Newsletter 第 53 号
発行：日本語用論学会広報委員会
発行日：2025 年 6 月 1 日
［広報委員会］
＊　委員長：横森大輔
＊　Newsletter 編集担当：
＊　野村佑子・工藤貴恵
＊　公式ホームページ担当：
名塩征史・李頌雅
＊　会員メーリングリスト担当：
木本幸憲・盛田有貴
E-mail: webmaster-at-pragmatics.gr.jp